中央市の恩師との絆

私が初めて中央市の恩師ながさかまゆみ先生、旧姓かさいまゆみ先生と出会ったのは今から今から５９年前、１９６４年の９月の末だった。

竹を割るような気風の良さは、私の初恋の人、今は亡きふるやあつこ先生に似ていたが、ながさかまゆみ先生は瓜二つの顔なのかそれとも普通に如才なく話ができる人なのかその人の性格が読めなかった。私は自己紹介を、ユーモアを交えて言葉を交わした。ながさかまゆみ先生は「そう４月生まれなの。私もそうよ、よろしくね」と言って初対面の挨拶を交わした。

過去の第２の故郷青い鳥学園は、幸せを呼ぶ鳥とは歌っていたが雰囲気が暗かった。ながさかまゆみ先生だけは第２の故郷青い鳥学園の保母さんたちとは違い我々に明かりをともしてくれた。また我々とともに泣き、ともに学び青春時代を歩いてゆこうとして、人への気配り思いやり温かさは誰よりも一番持っていて、第２の故郷青い鳥学園の第１人者だと思っている。

それから７か月後の１９６５年（昭和４０年）には初めて部屋の指導者に抜擢され１年間過ごしてきたが、私は、その時にながさかまゆみ先生との間で忘れられないつらい思い出があった。それは私がながさかまゆみ先生に隠し事をして夕食をもらえないことがあった。青い鳥学園で使っている点字紙は私が使っている点字紙よりもひとまわり厚い点字紙、そして私が使っている点字紙は青い鳥学園が使っている点字紙よりも一回り薄い点字紙でした。はっきり伝えてなかったのはあくまでも私のミスだから致し方ないことだと思った。でもながさかまゆみ先生が現役の職員でいる時になにか大きなご恩返しができないものだろうかと思っていたが、翌年の秋１９６６年（昭和４１年）には今は亡き、いいのかつこ先生から「あなたをハーモニカミュージシャンとしての横綱に推挙します」と言われて、その報せをながさかまゆみ先生に伝えたら「ゆきちゃんの努力が実ったんだよ、おめでとう。それじゃあ山梨共立病院に入院中のたかだともこ先生に報告に行こう」と言ってふたりで山梨共立病院に入院しているたかだともこ先生に報告したら、たかだ智子先生は感極まって涙声で「おめでとう」と言って喜んでくれた。

ここからは後半戦です。翌年初夏から夏に変わる頃１９６７年５月１５日には再びながさかまゆみ先生が２回目の部屋担任に抜擢され、そのときからは積極的に珠算クラブに参加した。たとえ体の古傷がうずこうとひとつのことに全神経を集中していると体の古傷の痛さも忘れ、その日の夕食はいつもの夕食と違っていて格別に美味さを感じる。でもながさかまゆみ先生は「いいんだよ、無理しなくて体が資本だからね」と言って私を優しく励ましてくれた。また時には私の目の洗眼までもよくしてくれた。また、ながさかまゆみ先生が手掛けていた部屋の重度さんの体の具合の悪い時には私は夜も眠れず、また無情にもわたしの古傷が痛くなる。そんな時ながさかまゆみ先生は「ごめん、ごめんね、ゆきちゃんが部屋の重度さんのことを心配してくれるだけで先生とてもうれしいの」と涙声で、二人でともにひとりの人をすくい助け合うだけで私の体の古傷の痛さも忘れる。

そして今もなお、ながさかまゆみ先生との絆はつながっていて、私の良き相談相手として尊敬している。また再びこの世に生まれ、ながさかまゆみ先生に出会えたら二人で人生を歩き、二人して演歌１００ケ所コンサートをするのが生まれ変わった時の未来への夢です。